

凌霜会の皆様，はじめまして．2005年4月より神戸大学大学院経営学研究科に助教授（2007年4月より准教授）として着任いたしました三古展弘（さんこ のぶひろ）と申します．

さて，本稿のタイトルは，「理系と文系の違い」というものです．このタイトルは，私が元々は理系の出身であるにも関わらず，就職先が文系の経営学研究科であったということから感じた様々な違いやカルチャーショックを皆様にご紹介したいという思いから選びました．

そのために，まず，私の経歴を時間順に簡単に紹介させてください．1999年3月に名古屋大学工学部土木工学科を卒業，2002年3月に名古屋大学大学院工学研究科地圏環境工学専攻（博士課程（前期課程））を修了（途中，交換留学によりフランス国立ポンゼショセ工科大学国際経営大学院でMBAを取得），2005年3月に名古屋大学大学院環境学研究科都市環境学専攻（博士課程（後期課程））を修了，という具合です．途中，MBAを取得したり，所属の名称が変わったりしているものの一貫して理系の，特に土木分野で活動してきました．保有している最高学位は博士（工学）です．経営学研究科の教員の中には，理系のご出身の方もいらっしゃいますが，私のような経歴の持ち主は少数派でしょう．なぜ，私のような理系出身の研究者が文系の経営学研究科に就職することになったのか，疑問に思われるかもしれません．簡単には，私の専門としている「交通」は文系でも理系でも取り扱われている学問なので，理系と文系が比較的近かったということが1つの理由です．しかし，この点については本稿ではこれ以上触れないことにします．

それでは，私の感じた理系と文系の違いやカルチャーショックを3点にまとめて述べさせていただきます．

まず，1点目は学年の規模が違うということです．経営学部の定員は1学年260人程度となっていますが，私の所属していた名古屋大学の工学部土木工学科は50人程度でした．ときには，朝の1時限目から午後の4時限目まで，50人が同じ部屋で講義を受けていることもあったと思います．ですから，同じ学科に所属している人の顔と名前や若干の性格までもおおよそは一致させることができます．

これに対して，経営学部の講義は，私が勉強のために聴講させていただいたいくつかの講義を見ても雰囲気が大きく異なるのは1つの特徴です．一部の講義は経営学部だけでなく法学部や経済学部の学生の受講も認められているようですので，履修者が数百人規模という場合もあるようです．これでは，同級生の顔と名前や性格まで

も知るのはかなり難しいことと思います。

私は、今、学部生向けには「外国書講読」という履修人数が 40 人に制限された講義だけを担当しています。いずれ、数百人規模の講義を担当することになった場合、その違いを再認識することになると想像しています。

2 点目には研究室のあり方です。私の所属していた理系の研究室では教授、准教授、助教（昔の言い方では、教授、助教授、助手）という 1 つのまとまったグループを作り、そこに大学院生の博士課程（後期課程）、博士課程（前期課程）、学部 4 年生（教授、准教授に対して 4 年生は 2 人程度ずつ配属）が所属するという形態をとっていました。一方、文系では、教授、准教授、助教でグループを作って活動をするという場合が少ないように思います。私も文系では「部屋を 1 つ与えますから個人で研究してください」というような形になりますよ、ということを承諾して神戸に来ましたが、事前に聞いていたとはいえ、これも大きな違いであると感じます。

理系の研究室に対しては文系のゼミというものがあると思います。神戸大学の経営学部でも 3 年次、4 年次とゼミに所属することができ、各年次とも最高で 10 人程度の人数で構成されているようです。また、大学院生のゼミもあるようです。私はこれまでゼミの開講は免除されてきましたので、ゼミの学生を指導したことはないのですが、1 学年で 10 人程度も指導する場合があること、大学院生が理系と比べて少ないことなど、将来、その違いを再認識することになると思います。

最後の 3 点目には業績に対する姿勢です。我々研究者は、論文や書籍などを書いて、それによって評価されるという部分が大いにあります。その中に、単独執筆による単著論文と共同執筆による共著論文という区分があります。私の所属していた理系の土木系の分野では、学生が論文を執筆する場合に指導教員の名前が入るのは当たり前という発想になっていたと思います。実際、私も学位論文を除いて、学部 4 年生、大学院生時代に執筆した論文は総て指導教員との共著論文です。また、就職してからも、指導教員からデータをお借りして分析している論文は総て指導教員との共著論文です。（就職してから 4 年目の終わりにようやく単著のディスカッションペーパーを書きました。）ところが、文系では、かなり早い時期から単著論文の執筆が行われるらしいのです。文系と理系の両方の事情に詳しいある先生からお聞きすると、同じような方針で指導が行われても、文系では単著になり、理系では共著になる場合もあるようなのです。また、文系では指導教員との共著しかない研究者として独り立ちしていないと思われるような分野もあると聞きまして、このあたりも理系との違いであると思います。また、論文には審査に通ったも

のが掲載される査読つき論文と審査に通らなくても掲載される査読なし論文がありますが、文系には紀要というものがあって、審査なしの論文が比較的自由に掲載される論文集があるのも特徴だと思います。また、分野によっては、論文の著者順が英語ならアルファベット順、日本語なら五十音順になることもあるそうです。これも、貢献度順に著者順が決まることに慣れていた私には驚きでした。

なお、最後になりましたが、本稿は私の所属していた理系の一学問分野と現在所属している文系の一学問分野を一部、想像も交えて比較していることはお断りしなければなりません。経営学研究科には様々なバックグラウンドをお持ちの先生方がいらっしゃいます。このような組織の中では、お互いの立場を尊重する姿勢が必要とされるのではないかと思います。